

「橋の手前」の資質

—— 芹沢光治良論の基点として ——

大森郁之助

芹沢光治良の出世作「ブルジョア」(昭5・四月号『改造』)は、有名な

これも崩滅する階級の一態である。

という一行を序詞として始まった。また、のちに教職を辞して文筆業に専念することとなったその翌年の作品「橋の手前」(昭8・四月号『改造』)では、

学理上マルクシズムが××××、それは疑問はないとしても、それだからとて直に橋を渡って実践に行け

ないわが身を「社会のお荷物」と自認する主人公を描いた。△橋の手前▽という語は広く相似た立場の通称化し、一種の流行語化したときえいわれる。昭和初年代の自由主義作家、或いはより限定して「同伴者」作家の、代表格の一人としてしばしば挙げられる所以である。

だが、彼が「同伴者」として、△同伴▽対象の左翼運動乃至ぶろれたりあ文学に対して何を為したか、どのように△同伴▽したか、という点では、評価——というより認識は、二通りに分かれるようである。「同伴者」的志向の文学一般の、積極的役割は、瀬沼茂樹氏の要約を借りれば、

(略) それぞれの作家としてのヒューマニズムの要求がしめした

社会的関心であり、各自の文学的立場を踏みこえることはなかったけれども、社会運動が共産主義化して尖鋭化し、苛立つていても、またにわかにその関心を変えることなく、(略)比較的に離れた立場から革命運動そのものについて、また革命家たちの人間的過誤についてくたした批判または役割を考える方が、意義が深い

と考えられる。「同伴者作家の人間の良心と達識とが、思いもかけぬところで、当時の革命家のもっていた人間関係の矛盾や、革命運動の盲目的な都合主義に、鋭い、曇りのない目をそそいでいること」が期待されるからである。そしてこの「過誤についてくたした」「批判」という要素を、瀬沼氏は「橋の手前」において次のように看取される。即ちこの作品には、

(A) (略)「銀行ギャング事件」以来の「資金網の破壊」が、「同伴者作家」をも運動にまきこもうとする独善的な性急さに、当時の階級運動の有りかたにたいする作者の批判があったと、考えることができる。「銘々の過去や性格や役割」のちがいが、——同伴者作家が階級運動で占めるであろう位置を、それとして評価することができず、運動の目前の政治的必要から、性急にふみにじって顧みようとしないことにたいする作者の抗議である。

これに対して、結論として反対の形になっているものに、明晰な実

態分析をふまえた大津山国夫氏の把握がある。^(注2)すなわち「橋の手前」の主人公である小説家は「作者の分身と考えてよいであろう」が、この主人公は「小説にかぎらず、政治以外の仕事に従事することが罪悪であるかのように考えられた一時期」の「いわゆる政治主義的偏向」の「思わぬ余波」を受けている。「ムッソリーニ治下のイタリアに仮託してファシズムの害毒を警告した芹沢の『黒』（昭和六年）」という小説（略）などは、それ自体が重要な政治的役割りを果たしていた」のに、彼自ら「同伴者」の位置をひけ目とし、「臆病者だと笑って下さい」と「自嘲で語」る。

(B)プロレタリア文学の偏向にたいする批判者である前に、すでに彼ら自身がその偏向の同行者だったわけである。

同伴者文学からの左翼運動に対する批判というものを肯定し、それを同伴者文学の積極的価値と考える点では、瀬沼文と殆ど同じといってよからう。しかし現実には、そうした批判や批判的姿勢が、「同伴者文学」とよばれるものの中にどれほど実在したか。大津山氏の認識によれば「橋の手前」の場合も、主人公の自己評価は肯定よりも否定が、より基調的である。左翼運動に対して非隷属の立場を自ら肯定し得ない者が、左翼運動に対して客観的な批判を保つということは、論理的にもあり得ないわけである。

だが、そうかといって、瀬沼・大津山両文に代表させた二様の見解を△反対△と云ってしまうならば、少なからず形式的な区別の気味があろう。現実の「橋の手前」の本文には、同伴者にとどまっていることを許さない運動家に対して「抗議」したい思いと、その抗議の正当さを確信しえず「自嘲」の形にしよう「偏向」とが、常に牽制し合って併存しているのではないか。例えば、「愈々決心して左翼の陣営に飛び込むことにし」た旧友空見からその事情をくどくどと説かれた時、主人公杉野と友人の花田は、「咄嗟に云ふことがなかった。」

学理上マルクシズムが××××、それは疑問はないとしても、それだからとて直に橋を渡って実践に行けるかは、銘々の過去や性格や役割で異ふであらうに、空見の説明には、さうできない二人に向けた非難が狡くかくされてゐるやうに、少くとも二人の胸には響いた。（「橋の手前」一）

「マルクシズム」の「学理上」「疑問はない」正当さは、しかし、直ちに実践に結び付くものでなく、実践を決定するのは「銘々の過去……役割」だ、というのがここでの杉野たちの理性的認識である。それならば杉野が個人の事情によって実践に行けないことも又、正当である筈だ。それを非難するのは不当である筈だ。だが眼前の空見が「非難」を、しかも「狡くかく」してぶつけていると感ずても、それに対して詰り返すことは結局出来ないのである。

詰り返さないのは、少なくとも杉野の場合、際限ない議論の煩わしさや係り合いを避けるといった、便宜的理由からではない。詰り返すことの出来るより公的な、第一義的な正当性は自分の側になく、相手の側にあるという、より統括的な認識からである。そのことは右の引用箇所の直後に、空見の態度をただ「うるさすぎる」と感ずる花田との対比で示されている。

杉野は然し空見の決心に×××、その顔をまともに仰いだ。×××××××××衝動を感じながら、杉野は口をきかない長い闘病の習慣から言葉が重く、云はうとする心を目に湛へ（一）

伏字が多いが、空見から「も初めて微笑を答へ」てきたという次文によっても、杉野の心情は十分察せられよう。更に、

躊躇ふことなくそこに行ける（空見の）鉄の健康が羨しく、同時にどんなに非難され、自ら反省しても、のらくら社会のお荷物として生きねばならないわが身が、堪らなかつた。（一）

という、解決されようのない反省も述懐されている。ここでは「病

「気」という個人的事情が「非難」に抗弁し得ないものとされ、しかし同時に、その事情による非実践が改め得ないことも認められている。

先程の引用文と内容は逆だが、構造は共に理性的認識と行為事実との背反である。二つの文を並べてみれば、自己の非実践を肯定する理性も否定する理性も、共に、確立してはいない。共に、感情に対する理性と称ぶに足るものには成っていないことが、明らかであろう。

別の友人が党の資金部長として検挙された時、夫の身を案ずる妻に向かつて杉野は、

「小説を書くのでなかったら……病気でなかったら……そんなことになったかも知れんが」「空見などのしてゐることが××××、然しそれはそれとして、僕は小説より他にすることがないんだから——」

と「急いで加へ」る。(二) この会話の前半部は、既出△個人の事情▽の△云い立て▽方の、繰り返しである。だが後半で、空見などの正当性を「それはそれとして」自分の場合と切り離す理由は、「小説より他にすることがない」からだと云う。△自分には小説があるから▽別なのだ、と云いかえれば、言葉のひびきはかなり変わってくる。だが主旨は殆ど変わるまい。この△理由▽づけは、のちに次のように敷衍されている。

死病を数年闘ひ癒してからは、たゞ大空を仰いで無為に生きてゐるのも仕合はせである。ましてわが書く小説を待つて呉れる読者もある。(以下二十九字伏字) 危険を冒すことは出来ない。生きて社会を長く見届けよう、その小説も或ひは貴方には無益な仕事と考へられようが、私には私なりの安心もあり、自信もある、全く無益なものであつても、こんな時代の一記録とはなるだらう。貴方がたを妨げはしないが、永遠のことを思つて創作することのみが、この暴風を正しく生き抜けるために、病弱な己の採る

べき態度のやうに思はれる—— (三)

ここで、わが「書く小説」を待つ「読者」というのを、わが「職業」の「顧客」一般と置き換えてはいけないのだらう。もし置き換えてよいのなら、少なくとも生業を持つ者は全て、事情(杉野の場合の「病氣」等)次第で、「危険を冒」さなくてよいことになる。彼らにとつて左翼運動は「危険」でしかないことになる。それならばいい、どんな身分の者が、「危険」である前に対社会「義務」・「正義」として「実践に行く」ことを妥当とされるのか?

当然、杉野の携わっているものが「小説」であるゆゑに例外的に「実践」を無縁視し得るのだと解されよう。だが、そうした「小説」の例外性は、ここでは「永遠のことを思つて」の営みとしか説明されない。他の生業でその結果が比較的永続性を持つもの、例えば大規模な土木・建設業などと比べて、小説を「創作すること」のみがどれほど特殊なのか? 果たして、特殊なのか? そういう愚問は浮かびさえしない。

杉野が非実践を保つことは、究極的には肯定されているといえよう。だが、△理論的肯定・公的承認は得られまいが▽という口ぶりで、である。自らに理論的正当性を認めた上で他に向かつていう場合を△批判▽とよぶとすれば、杉野は左翼運動を「批判」しているとは謂えまい。△弁解▽以上の強さがあるとしても、それは正当性の主張を伴なっていない△居直り▽に近いものではあるまいか。そうした居直りを生んだという事実から出発して第三者が、対左翼運動△批判▽を持ち得る、というのは、又別の事である。

かくて、瀬沼・大津山両解を顧みていえば前者はより第三者的・結果論的な捉え方であり、後者は杉野(及び作者)の心理に即しているといった差違があるろうか。

Ⅱ

ところで、人が居直るのは問題を回避も猶予も出来ない逼迫した状況に追い込まれてなおかつ、自らの捨て得ないものが客観的に正当化し得ない場合である。いわば或る人間と或る問題との関係の、最終段階の一態である。

左翼運動実践と芹沢光治良の心情との関係がここに到る以前の段階では、芹沢の姿勢はどのようなものだったか。

「崩滅する階級」という決めつけで始まる「ブルジョア」は、文章の上だけでなく内容としても、この「崩滅」Vという階級観。社会観を文字通りの前提としているかに思われる。即ち、崩滅することの是非などはもはや論じられない。崩滅は「打ち上る波のやう」な必然として扱われ、疑問や抵抗もない代りに努力や闘いも求められていない観がある。少なくとも、主人公沢を含む、政治的人間でない大多数にとっては、意識的な努力などの関わりは求められていず結果だけをやがて黙って引被るであろう、一種の心理的余所事の観がある。

見方を変えれば、努力し闘っている当事者のいずれの側をも、機械的なまでに公正に客観視し得ている作品、ということにもなるうか。

すいすの結核療養都市を舞台とする国際色華やかなこの小説には、ろしあ。伊太利。どいつ等の「共産主義者」も賑わしく登場し、一方「黒シャツ党员」も姿を見せる。そうした中で、例えば「有名な無政府主義者、クロポトキン公爵の一人娘である」さあしやが、「私の母は今もモスクワに居ますが、最近、誰にでも櫛を二枚託されたらさうしてくれと書いて来ました。どんな良い制度や設備が出来たのかも知れませんが、寄る辺ない母に櫛まで不自由をさせ、その上、娘の処にも帰さない国を、良い国だと思へませんわ」と沢に訴える。そのとき、「その言葉には真剣味がこもってゐた。」と、作者は書く。さあしやは

更に「革命は人を変へます。……」とも云い、又、「労働者の国家から国費を貰って、其の金で、哀れな女を買ふ」共産党员の青年びええるに向かつては、「お前は見さげた根性になってしまった。お前のコンミニズムがお前をそれ程にしたのか。……」と詰る。この難詰は一種の短絡と揶揄されることもありそうなものだが、作者は、さあしやの思いつめた語調をそのまま写しとるだけである。（「ブルジョア」二）これらと反対の、左翼運動への共感を促がしそうな激越な事実も又、作者は激越さをその儘淡々と伝達してよこす。

結核都市の公衆病院に収容される青年達は、「資本主義が整然と発達し切ったヨーロッパで、中産階級以下の家庭に産れた者が、所謂成功しようとする（略）橋のない大河を飛び越えるに似」た夢に破れ、「崩れかゝった軀を此処に運んで来」るのだが、

「それは夢ではなかった。人間の誰もが願って良い事であり、我々の努力は貴いものだった。それが酬いられず、夢とされるのは、社会制度が悪いからだ」／中庭の芝生に寝ころびながら、議論した一人のスイスの青年の言葉が、本当だと此処の患者は百も承知してゐるが、と、作者は流す。

階級闘争は言葉ではない。二階級の対立は、ヨーロッパでは議論ではない。事実だ——いゝえフルニッスル（下々の者）の子弟と一緒に、宅の子供を勉強させるなんて、さう云って公立小学校に子供を出さない巴里のブルジョア。そして其の小学校に入ったら、中等教育を受けられない仕組にして、子供の時から上下に一線を引いてゐる巴里。さうだ、社会学者ゴブローは垣と溝とこれと呼んだが、そんななま優しいものではなくて、鉄条網だ。（略）自由、平等、博愛、唯其の線内の自由だ。モロッコの戦争に行くな、それを叫んでも鉄条網に触れるのだ。（二）

という言葉の激しさも、他人事としての激しさといえよう。

だが、いかに感情移入を伴わずにしろ、共產主義(者・国)に生ずる人間性の欠損を(も)単刀直入に指さす事を得た「ブルジョア」と、空見の使の娘から強引に運動に誘われた時「知らずに空見の名刺を千切」りながらも、一方では「美しい娘が××××××してゐることに、敬虔な気もして」追返すのを躊躇ってしまう「橋の手前」(三)と。この差は何によって生じたのか。

「俺達の階級はかうして亡びるのだ」と諦観し了せる「ブルジョア」と、保釈中の空見の訪問を玄関先で拒んで

「宅は死んだ者と思って下さい」

芳枝はそのまゝ夫の書齋に逃れるやうに駆け上った。夫は青いカーテンを垂れ、卓に向つて執筆に余念がない。芳枝は後の安楽椅子に掛けたが、むしやうに涙が零れた。

「どうしたの」

「空見さんが——」

「泣くことはないではないか」

こんなにして友達を追ひ払はねばならないなんて、胸が裂けさう(略)

な、「橋……」の夫と妻のそれぞれの苦痛(三)と。だがこの差も、前件と同一の原因に帰せしめて解くことが出来るのではないか。それは、それぞれの作品の時点で、作者にとって左翼運動がどれだけ切実な問題であったか、どれほど具体的行為の選択を迫ったか、ということである。

恐らく芹沢自身が作成若しくは目を通したと考えられる略年譜(新潮社版・日本文学全集『阿部知二・芹沢光治良集』附載のもの)によれば、彼自身が「すいす・ふらんすの高原療養所で結核療養の体験をもったのは昭和二年から四年の間のことであり、「ブルジョア」は四年暮

に帰国する以前、滞仏中に執筆したものという。

この時期の生活を正面から作品化したのが「ブルジョア」であるが、同じ題材によるもの(注)に後年「離愁」(昭19稿)がある。

「ブルジョア」がやゝ通俗的とも見える程に客観小説仕立てであるのに対して「離愁」はより心境追求の趣をもつが、冒頭、結核都市の大病院に入つて最初の一週間の絶対安静の生活で、

残りすくない生に対する心構へとか、このサナ生活に対する態度とか、さまざまの心の準備をぼんやりながらしてしまった。人生に願望はない、ただ死にひんする肉体をもとどほりになほして起き上ることを、生活の目的にしよう。さう漠然と考へた。(「離愁」一)

のちにも「闘病とは無我になることだと、ここの仲間が私にさとした」とか、「妻や子からはなれ、たった一人の日本人である私は、日本のことも妻や子のことも忘れてしまったかのやうに穩かに、総てのことが死んだ己の外の世界のやうに思はれ」た、と記す。(二)一時、妻が巴里から追いかけて来て安静を乱すが、やがて戻って行く「私」は、

便りのないことを倅に思った。病室の壁にはつてあった子供の写真もしまひこんだ。妻や子もないものときめ、総ての絆から絶たれ、総ての者から忘却されて、ひたすら孤独に徹することで業病の克服を最後に頑張らうとしたから。(六)

肺患に対して「自然療養で象が去ってくれるのをのんきに待つのが常道」(三)という心細さだった時代の、療養所に在る者の心根として、これは恐らくぎりぎりの真実であつたろう。そこでは社会や国家に対する積極的な関わり合いなど考えられてはならず、社会、国家から事実身にふりかゝつて来ているものも、忘れ去られねばならない。

こうした療養生活の中で主人公は、これまで専門としてきた社会学

の研究を捨て、文学に生涯を捧げようという執着にとりつかれてゆく。この文学志望は「徒らな空想でも、徒食しようと猥るい考へでもない」、「デュルケームの所謂モラルのやうに、それがなければ私の生活はばらばらになりさう」な、真摯な要求である。(八) だが真摯さと同時にその要求の、求心性、誤解を恐れずに謂えば自己中心性も、認められねばなるまい。要求が叶えられた場合の具体的な作品内容についても、「このまま病弱で寝たまま(略) 祖国からも社会からも隔絶せられてしまふにしろ、私の魂のなかには、書くことが無尽蔵に貯へられてあるやうに信じられ」る。(三)

そういった性質の文学者(?) 生活が、在欧療養生活中に新たに生じ、支配的となった願望だったとすれば、究極的に人と人との間、群のあり方の問題である階級思想や社会運動は、風俗の一つとして、「好奇心がむらむらと昂ぶ」る(「橋の手前」) 対象というほどにも心にも骨身にも突き刺さらなくて当然だったろう。

加えて、療養所内でこれらの思想や運動を具体的に演示してみせるのは、「自分を死の掌にゆだねて、明白に生きてゐる瞬間を必死に生きて飲む以外に、安堵もなく、死を滅する方法もないこと」を理解せずに、「死の影を消さうとするひたむきな技巧」で「病的なほど狂躁な雰囲気」をかきたてている(「離愁」五) 欧州人たちである。或いは、そうした雰囲気的一端として、演示されているのである。思想や運動の深刻な地色が紛れ易かったということも想像しうる。

「橋の手前」の時点では、そうはゆかなかったろう。「朝日新聞」に小説を連載したことについて大学当局より迫られ(年譜)、前年(昭和七年)に中大講師は辞任しているとはいえ、既に『改造』『新潮』『文芸春秋』等に作品が掲載され、新鋭文学叢書の一冊として『ブルジョア』も刊行されて(昭五) いる。「一度小説を発表したら、世間は小説家としてしか扱ってくれ」ない(「橋の手前」三)、云いかえれ

ば「小説家として」社会に認識され、一定の対社会関係を設定してしまっているのである。しかも、少なくとも自意識としては、「伊太利のファシズムを主題にお書きのものに最も感心いたしました」と言われて、特に当惑はしない(同前)、或る傾向の作家として。

芹沢の本意がたとえどうあろうと、左翼運動の側からもその反対の側からも、運動への参加か否定か、どちらにしろ現実世情との具体的関係を結ぶことを迫るのが当然だったろう。現実世情との間に虚空を隔ておくことは、もはや許されなかったろう。

このような推測を芹沢の内面から裏付けるものに、例えば十四年五月稿の「愛と死の書に関するノート」がある。これは十二年十二月から十四年七月にかけて発表された小説「愛と死の書」に関する作者の自注ふうの文章だが、「愛と死の書」自体は「若子といふ人妻を主人公に選」び、その夫・母・弟の次々の死を主題とする。しかし、例えばそうした主人公の設定などはこの作品の内容的虚構性を意味するものではなく、

死と愛といふやうに、身近く体験したことは、主人公に女性を選ぶやうな間接的な手法をとって、しかも、それを私と一人称にして、語らせるやうな形式を選ばなければ、散漫と個人的な体験を述べる惧れがあると考へたからである。この女性は、私の設定した一種のレンズの役だった。(「ノート」)

と芹沢は云う。即ち、工夫を凝らさねば散漫な述懐になるだろう程の未だ普遍・客体化し得ない身につき過ぎた体験であった(又は、体験が在った)ということである。その「愛と死……」において身辺の死に対して感じたところと、かつての療養中の自らの死の幻影とを比べて、芹沢は云う、

スキスにゐる頃には、発病前に産れた長女もあり、遠く日本から離れてゐて、子供に対する愛情の切なものはあったが、さう悲し

まずに死と向きあつてゐられた。死ぬといふことが、常に考へられるやうな、恐ろしくも、悲しくもなく、穏かな心で迎へられさうであつた。尤も健康になるに従つて、死が怖ろしく、生に執着しだしたが、これは自ら死を直接に眺めてゐたのだが、母の場合は、間接に死を眺めてゐたためか、母の死に向ひ方は痛ましく、大変なものに感じられた。死に対する感じ方のこの相違は、若さと老いとかから生ずるのか、近頃のやうにすっかり健康になつて、ふと死のことを思ふと、どうして、スキスの山で感じたやうな易しいものではない。愛で結ばれる人々が多くなつて、独りすっぽり抜けて行けないやうに、心が残るからだらうか。

(ノート)

療養時代と直接比較されている心境は「橋の手前」などから更に数年後のものであり、又、焦点は死に対する感度に絞られている。しかし、療養時代の後のものとしてのこうした変化は、帰国後三年を経た「橋」の時点でも多少なりと生じていたと見る方が自然であろう。また△愛による対人関係の増加→生死へのこだわり△という関係は、至極容易に、△社会人としての復帰→社会事象の没主観的受け入れの困難化△を類推させよう。

即ち、「ブルジョア」の沢が資本主義社会崩壊の予想を全く無作為に受け入れていても、それは△同伴▽者としてではない。彼は心理的に、この世に住み合わせていない立場なのだから。

それに対して「橋の手前」の杉野は、心理的には完全な分極状態に停滞している。左翼運動に加わっていない自分を、否定する理論と、肯定しようとする理論と。忸怩たる感情と、昂然としようとする感情と。そして実際の行動としては、今の状態から一步を踏み出すことは恐らく今後共起るまい。「学理上マルクシズムが」正当性をもつと認めていると、自ら云うだけに、主観的には一の「反動」分子（実に微

弱なものではあるが）ということにさえなるのではないか。

しかしこの比較によつて「橋の手前」を、「ブルジョア」から一步後退したもの、と謂つたならば、事実を誤ることとなる。同時に、「ブルジョア」の傍観の主体的意義を、FadieやSetonの観察記などとは全く別種のもののように幻覚してはならないだらう。

III

とはいえ、「ブルジョア」において、眼前で激突する二つの思想・行動に対する沢の立場からの選択というものは、全くなされていないというわけではなかった。

選択は一度だけ、なされている。

療養中の共産党員の行動を監視し通報するよう、贖患者の黒しやつ党员から頼まれたとき、沢は峻拒して、

「此処から直ぐに出て下さい。そして明日早く貴方の国にお帰りなさい。」「皆病人です。静に養生させなさい。貴方は戸惑ひした犬です。（略）」

「此処だけの話にして」

「日本人は卑怯な真似はしません、安心していらつしやい」

「貴方も革命家ですな」

「馬鹿、卑怯者より革命家になつた方がましだ」

という問答が交わされる。（二）

「卑怯者よりは」まし、という対比し方が示すように、革命△思想▽が、例えば反革命△思想▽との比較によつて△思想▽として評価され選択されたのではない。卑怯という△倫理的▽低劣と比べて、それよりは低くない、又はそのようにはつきりと低くはない、という意味での、倫理的選択なのである。ふあしむの側からいえば、その思想の誤りや低さの故に斥けられたのではなくて、△思想▽とは別範疇の

△倫理▽を沢が採った為に、倫理に繋がっていないこちらは斥けられたのである。

思想の正否判断が、思想以外のものとの択一に切り換えられ、正否を問いつめぬ儘に斥けられる。この型を拡大解釈すれば、「橋の手前」における「貴方がたを妨げはしない」が「永遠のことを思つて創作することのみが（略）己の採るべき態度」だ（三）という、△思想▽と△創作▽の代替関係視も含まれよう。

但し「ブルジョア」での△倫理▽は敢然と△思想（の正否）▽を超越し、その優先権を宣言するのに対して、「橋……」の△創作▽は「私なりの」安心として擁護されるにとどまる。相手から「無益な仕事と考へられよう」（三）ことまで論破しようとはしない。創作を採る自分も守る代りに、思想を採る相手も非とは断じないのである。他人は他人、自分は自分というのも実は傲慢であり、或いは最も恐ろしい傲慢であるかも知れないが、他人は全て誤っているか或いは自分以下で、自分（の考え）のみが正しいのだ、と信じ唱える傲慢さとは、やはり区別されるべきだろう。

そして、芹沢の左翼思想超越のしかたは、やがて後者の傲慢さに変わってゆく、と大津山氏は指摘される。^{（注2）}「橋の手前」の続篇「風迹」（昭和^{（注5）}10）の、

杉野は小説こそ書いてゐるが、専門は実証経済学であるから、時勢がどうか、マルキシズムが何か、百も承知してゐた。たゞ、長く欧州に生活して、ギリシャやローマなどで人間の遺した芸術の偉大さに感動して、憑かれたやうにこれこそ安心して生涯をかけられると、学問を創作に代へたのであるから、芸術も教養も境遇も感情も何も彼も脱いで、真裸に鉄製の仕掛人形の如く一方にのみ向つて飛び出す真似が、仮令病気でなくても、できさうもなかったまでである。

という一節を、大津山氏は、「文学の名によって、あるいは文学者の手で、人間性の歪曲と冒瀆がおこなわれた」「いくらでもある」事例の一つ、「文学といえは何か人間的な或るものであるかのような考えは、理由のない幻想である」「一つの証拠」と評された。これは決して云いすぎではあるまい。右の一節を左翼運動家を主語にして云い直せば、彼等は、杉野から見れば「百も承知」の事に向かつて「鉄製の仕掛人形の何く」飛び出している、ということなのだ。彼等がそうする理由は、杉野のように「長く欧州に生活」し「芸術の偉大さに感動」したことがないから、杉野のような脱ぎすて得ない「芸術も教養も境遇も感情も」持ち合わせていないから、——と作者は云っているのだ。のぼせ上がったとでも云うほかない思いあがりぶりを自らゆるす根拠は、ただ、杉野が△芸術の徒▽だから（!?）なのだ。

或る種の左翼文学の情操の蕪雑さ、非人間的な資本家悪玉視を芹沢が肯定し、自分の文章もかくあらうとしているなら別である。そうした左翼文学の弊風も含めて「鉄製の仕掛人形」と嘲っているのであれば、そのような嘲りかたによって自ら同種の仕掛人形化している、まことに皮肉な循環である。

思想超越の拠り所とする芸術への確信の強さ、思想を斥ける選択の声高さは、「ブルジョア」で思想を斥けた倫理主張の烈しさの、延長線上とも見えるかも知れない。しかし、「ブルジョア」では、相手も持っているはずの人間性としての倫理によって、人間の営為の一つとしての政治思想を衝つたのである。「風迹」では、自分の営為である芸術によって他の営為である政治思想を貶め、更にその貶しめられた営為に結びついているゆえをもつて彼の教養・境遇・感情までも蔑みした。人間性乃至一の人格と、一の人間活動との軽重が逆転しているのである。

大津山氏はこうした「すさまじ」さを、かつての「自嘲や劣等感が

裏返しされ」た結果の「畸型」であり、その蔭に「政治は常に理不尽な或るものであって、文学は常にその被害者であるという、自然主義以来伝統的に受けつがれてきた作家特有の発想がひそんでいる」ものと把握された。この本質としてはその通りであろうが、「風迹」の場合、文学（芸術）をして政治に抗する人間性の証しならしめるにとどまらず、政治をも人間性をも見くだす絶対者——の非・人間性に、肥大させてしまった。

かくて、「同伴者」的志向の反動といった一般論の他に、芹沢固有の問題があり、危険が予感される。文学（芸術）の非・人間性への変格は、政治という非・人間性に抗せしめるための扱いが勢い余った、勇み足なのか。それとも意識しての扱いであるか。若しも後者であれば、以後、△政治▽に関りない作品においても、この作者が持ち込む△文学▽△芸術▽は、非・人間性としてはたらくことを予想せねばならぬ。

この点の判断の材料は、「その文学的業績の中心に宗教的な濃厚なヒューマニズムの流れがある」作品の多くが「一種の思想小説」である芹沢の場合、随処に見出だせよう。

だがここでは、△芸術▽という觀念が、われわれの普通△人間性▽乃至△人間▽として美しいあり方と観じているものを、自信に満ちて見下している例を挙げておこう。

それは昭和十七年の作品「巴里に死す」での、女主人公伸子（私）に対する批判の立脚点である。芹沢の作品には、欧州で結核療養中の夫とその心境を理解せざき乱すばかりの△悪妻▽という人間関係が屢々描かれる。

その△悪妻▽ぶりはかなり類型的で、精神的なものを解せず物質的関心が強く、微妙な神経やいたわりがはたらかず我執が強く、自己の趣味といったものを持たず、子供への本能的な愛が専らその時々に行

動を決定する、——と概括できそうである。この妻を、夫の側から苦しみと闘いを通して捉えた決定版が「離愁」といえようが、それに二年先立つ「巴里に死す」では、妻の方を結核患者に（後半で）し、彼女の側から自身の悪妻ぶりを描かしめて、いわば Gide の「女の学校」に対する「ろべえる」の關係と似たものになっている。

しかし、他の、夫から見た悪妻という場合と違うのは、彼女が初めての受胎によって、「自分のからだやこころのなかに、良人を吸収するような、良人に同化するような、安心が萌してき」「心も彼の心に見えるようにしたいと秘かに努力し」出すことである。結婚以来この時まで依怙地に固執してきた自分を変えて「宮村の心に近づきたいと努力するけれど、それを妨げる雑念や感情が雑草のようにむらがって、宮村の心には似られない。因縁だとか業だとかいわれるのは、この心の雑草のことだと、やっとさと」り、「この雑草を刈ることが私の修養でもあり、良人への愛だと、はつきり思」う。この変化は当時においても「私にはこの上ない幸福」と感じられ、この手記を娘への遺書としてしたためる時点でも「お前をやどしてはじめて、こんな風に謙虚な心になれたのだ」と肯定し持続される。

夫を主対象としてのこの変化は、生児に対しても、理想化された観のある献身となつてゆく。母体保護のために中絶を勧められても「子供のために命をささげることが、母としての喜び」として拒みながら、「人なみに産むことができないとは、よい妻でないために神様からの処罰であると、本能的に感じ」「宮村にも詫び、神様にもお詫びして、赦しをこわなければいられない心情であった。」（以上、第三章）やがて出産すると、永い間嫉妬の対象だった夫のかつての愛人△鞠子▽になぞらえて万里子と名づけ、「お前こそ鞠子さんのように立派な精神と理知とを兼ね備えた娘になって、お父さんを慰めて」くれ、と「いつも希」う。そしていつか、「母と子の愛情さえ、苦しんで創つてな

るものであるものを、まして、夫婦の愛は生涯精進してこそ最後に授けられるものであらうということにも気づくのである。(以上、第四章)

だが、出産はやはり主人公の肺患を再発させ、夫や娘と別れてすいすいの療養所に入ることになる。しかしそこでも彼女は、看護の尼僧からは「フランスの女性はみんな良人のことを思い煩って悲しむけれど、日本の婦人は子供のことを思い煩って悲しむ。良人のことでは信頼し安心して居るのでしょね」と評される。「考えれば、自分の歓喜や欲望を殺して、その代りにお前や宮村の幸福を願わなければというところが(略)私の体得したさとおり」であり、「お前と宮村の幸福のためには、私のようなものでも必要であるという意識が」、「死ぬ方がよほど簡単でらくなことだと、何度思ったか知れぬ」闘病生活に堪えさせたのだ、と彼女は追想する。

自分の現世的欲望を放下する、というまでは、「離愁」の夫の闘病覚悟もほど同じである。更に「離愁」で「A子(妻)」も子供も総て忘れ、自ら死んだものときめてしまつて、雲になり雑草にならうとする(二)のは、その必然的發展とはいえないよう。だが、そうした意味での必然性もなく發展ともいえない低迷であるとしても、「巴里に死す」で身を亡いものとして夫と子の上を希うのと、倫理的には、いずれが高しとされるべきか。闘病精神としての純度、とは違うのである。

結局彼女は、「ただ母親の場所は子供のそばにあります。／子供のそばに在ること、私が滅びることになつても、よろこびでございます。(略)今のままでは私は、子供には死んだも同然です。」という思いが、療養半ばで「健康によいことか悪いことか、わか」らない巴里に戻らせ(第五章)、「信仰をしっかりと握つて、もう神様のお旨に委せていられるような立派な態度で」死んでゆく。(終章)

通観して、受胎・出産までの主人公は、「離愁」その他で夫とは人間的段階が異なるものに描かれ応接されていた妻と、殆ど変わるまい。

だが後半の彼女は、理想化して描かれてい過ぎる感じはあつても、描かれた限りでは、人間的到らなさほどのようにも看とれまい。少なくとも、印象づけられまい。作者の眼を離れてここに描かれたような生き方自体を批判するとなれば話は別として、作者の描き方は、批判や、まして非難などは、含んでまい。本文に拠る限り、芹沢は、母となることをもって人間的理想像への接近の契機として、認めている。その前に、母となることによつて到達し得た境地に、手放しに近い賛美を与えていると云つてよいのではないか。

しかも、繰返しになるが、こうした八愛に洗ひあげられた／妻の造型も、それに対する賛美といえる扱い方も、共に、この作者の在外夫婦生活ものとしては稀なことではないのか。少なくとも二年後の「離愁」では全く反対といつてよい造型と扱いの、決定版を作り上げていることと対照的なのである。「離愁」の妻にも、或る時幼い娘をさして、

「この子があなたにM子さんになればいいと思つてらっしゃるでせう」と、だしぬけに云つて私を狼狽させた。

M子とは結婚前に私の愛した女性であるが、(略) A子は私の考へ及ばないやさしい心でその詞を云つたらしく、顔を赤くして、「私はこの子があなたにM子さんになってくれればいいと思つてゐます」と、あわてて加へた。(一一)

という、「巴里……」と類似の場面もある。だが本質的には最終章(一二)まで変ることない「現実家のA子」なのである。

こうした前後関係の中にあつて、「巴里に死す」の妻の理想化が、情性的に、なんとなく行なわれ得たはずはない。理想化という印象が作者の意図なのかどうか、などという疑念は場違いでしかない——答

なのだ。

ところが、終章末尾に添えられた、娘万里子の（作者宛？）私信の形の文章には、母の手記（「巴里に死す」の本文）の読後感を次のように記す。

ただ悲しいことは、母が一途にすがりつくように父を愛そうとした態度でございます。同じ女性としてあまりご自分に自信のないぐうたらさが、お気の毒で歯痒く存じました。その態度が、父にも悲しく物足りなく感じさせたのではないのでしょうか。（略）自分を生かすことで、良人をも生かすという道が、女性にとって本道ではないでしょうか。母の手記を読んでいますと、母が自分を生かすような生き方をすれば、父も幸福になれるのに——とそればかり感じます。それができないというか、母には生かす自分がないので、ご自分も苦しみ（略）父をも不幸にさせているというふうに感じられて、私は深く考えさせられました。

「母」の結婚生活の前半部は全くその通りと云っておいてもよい。だが娘は、出産後の母の変化に対しても、前半と格別異なるものとしての評価は、別にしていない。わずかに「母はまた一心に努力して、母なりに幸福だったろう」とは云うが、あくまで「母なり」の幸福であって普遍的な祝福に足るものとは認めない。娘婿も「お母さんのこの努力は、君にも真似て欲しい」とは云うが、やはり「その努力の方向が問題だ」というのであって、母の「方向」は望ましくないのである。娘としての「せめてもの喜び」は、母が「最後に信仰のなかに安心立命を得」たことなのであり、出産による人間としての愛の甦りとあったことどもは無視されて了る。

非難は非難でよいとして、その難ずる焦点が、非難される側が生き方の中心とした所でないのはどうした訳か。非難は、対象の立場に立ってみることを経ずに、一つの固定観念を対置してその間の不合致を

問答無用に指摘することに終っている。

固定観念とは何か。

娘が云う、母には「生かす自分」がない、というのは、具体的には如何なる事柄の欠如をさすのか。性格的な、主体性の無さ、自我の無さではあるまい。彼女はむしろ、狭量な程に、自分の経験に無く理解を超えたものを拒むさがであった。

一般的に、向上心の欠如とも謂えまい。巴里での新婚生活のなかで彼女は「私なりに、よい彼の妻になろうと決心し」、具体的には「ピアノをもう少し上達させて、宮村が研究で疲れた時に、下手な音楽でお慰めすること、お料理を上手につくって喜んでもらえるようにすること、洋服をならって安い洋服で身についたものを着て、家計の負担を軽くすること」で、「それだけでも私には精いっぱいな気持」であったのだ。しかも彼女自身、「バりに住んで、こんなことしかできないのは悲しい」と云った。何が「でき」ればよかったというのか。作品本文に表わされた限りでは、夫が「音楽を聴いても美術を見ても、いつも（略）私のよい先生になって、説明してくれ」「私は感心するばかりで、彼の前で貧弱な自分をさらけ出し」「女学校でも、女学校を出てからも、私はなんにも学ばなかったように恥ずかしかった。」という悔いから考えるしかない。

つまり、音楽や美術に対する理解や、理解する志向さえない、ということが、ひとを愛しひとの為に自分があると感ずることなどより、人間にとって遙かに尊とく、又絶対必要なのだ、という固定観念であるろう。後者に満ちていても、前者が欠けているならば、それゆえに、後者単独では、一顧にも値いしないというのであろう。こう要約するのが恐らく芹沢の価値体系の正しい理解である証拠に、戦後、それが殆ど何の拘束もなく発露し得たと思われる「女にうまれて」（昭32・一〜十二月連載）では、次のような乱暴な対比となる。嫁いだ姉の「結

婚生活の毎日が、たとえ病院が忙しく、姑に仕える心使いは大変だけれど、新しいものを発見し、創って行くことの連続で、たのしくて張りあいがある、という心境の変化を、妹はこう批判する。姉が「ピアノに頼れないから、家庭的なことに頼って、婚家でなくてはならない人になろうと、必死になっている」その態度が、「本来の松子をおわすばかりでなく、いつか気がついた時には、自分を喪失して淋しくなるのではなからうか」。自分は「私の声楽を生かすと同時に、声楽を愛する私を認めてくれるやうな人とでなければ、決して結婚はしない——」。ここでも「芸術」が然らずんば「自己喪失」なのだという、単純至極な絶対視が提示され、作者はそれを「空想的であるが、それだけに純粹」と、それこそ純粹に肯定する。(七章)

この「女にうまれて」には、父(小説家「杉」)。おそらく読者は作者芹沢と解して読むだろう)の書庫が戦災を免れて「国文学の参考書も、フランス語の書物も大学の図書館よりもたくさんある」(四章)といった莫迦莫迦しい文章もあるが、右の人間観は、これもこの作者の通俗読者向け誇張の一つ、と云って済まされまい。婦人綜合雑誌の女性論と同水準の俗論が、婦人雑誌の連載小説でなら、作家にも許されようとするのなら、それは何よりも先ず、彼自身の芸術＝文学の神格視と矛盾する。

だが勿論これは読者への媚びなどではなく、もっと悪いことに、この作者の長い間の持論であり、かつては左翼運動という強大な圧力から身を守らしめた、大切なものであった。

大津山氏が「風迹」に指摘された非人間性は、或いは、左翼運動の非人間性に対する過剰防衛として促成されたものであったかも知れない。だが毒を制した毒はそのまま「風迹」の作者の身内に残った。左翼運動という外なる非人間性が消滅したのち、この内なる非人間性は単独に、従って動機に対する情状酌量の余地なく、独自の非人間性とし

て定着し、芹沢の作品の基本的性格の一つとなつて行ったのである。

注1 同氏『近代日本文学の構造』Ⅱ(昭38・三月、集英社刊)収、「同伴者作家について」

2 『日本近代文学』第1集(昭39・十一月)収、「『同伴者作家』ノート」

3 例えば明治三十七年四月の「小学校に入学。神童のほまれが高かった」とか、四十三年の項の「沼津御用邸に出入する皇族(略)」に深い印象をうけ、庶民の生活に疑問をもった。」などの文章である。

4 「離愁」の冒頭に、主人公「私」の遺児の芹沢宛私信という形で、

遺稿(「離愁」本文をさす)を読みまして、そのなかの父と母とが我が両親でないやうなのが、長い間の私の悲みであり、疑惑のたねでした。が、(略)父が作品として書いたものを、事実と読みちがへてゐたことに気づいて、安心したり、愚かな自分を笑つたりしたこととございます。ほんたうに、私の両親は遺稿のなかの父や母のやうなお人柄ではありませんのに、(略)ただ父がどうしてこんな作品を書いたか、どうしても解りません。(略)両親ともに亡くなり、父や母とは別な人格の主人公のみが生きのこつて、それが我が両親だと思はれるのが一番辛いこととございます。万一ご発表なさる場合には、両親の名誉のために、どうぞこのことだけはせめて書き加へていただきたくございます。

とある。この前置きには又別の問題があるが、当面、芹沢の体験の作品化であるのか否かという点に限って云えば、体験としての性格を根本と解する方が正鵠と考える。理由はいづれ別稿で詳論したいが、一口にいえば、遺児にとつて人どうしてこんな虚構を書いたかわからない、というのには、裏返せば芹沢として人虚構だと、論拠を付しては云いたて得ない、人虚構だと言つてはおくが、それは詭弁だ、ということになつてしまふのではない。そんな拙劣な云い方でまで人虚構と謂わねばならないのは、どんな実情がある場合だろうか、という考え方である。

5 昭和十三年十月作品社刊『大空に翔けん』に収録。(この項、大津山国夫氏の教示による。)

6 伊藤整、新潮社版・日本文学全集『阿部知二・芹沢光治良集』解説